

山土場等でヒノキ皮付き丸太に穿孔する害虫

林業試験場 経営環境部 法眼 利幸

〔はじめに〕

スギ・ヒノキ人工林の伐採は冬季に行われてきたが、近年は通年の伐採が増加してきており、同時に山土場等に集積された材に穿孔性害虫による被害が多発してきている。現場の要望に対応し本県に適合した対策を検討するため、基礎データの収集を目的としてヒノキ皮付き丸太に産卵する種と孔道の深さ等を調査した。また、本県の原木の流通過程における穿孔性昆虫の被害実態と対応を把握するため、関係者に聞き取り調査を行った。

〔材料と方法〕

（１）聞き取り調査

調査先は素材生産 7（生産業者 3 箇所、組合 2、林家 2）、原木市場 3（市場 2、製材所直営土場 1）、製材所 3。被害発生状況、原木や製品への影響、実施している対策等について聞き取った。

（２）割材調査

山土場を想定した田辺市中辺路町の人工林内（標高約 400m）と貯木場を想定した林業試験場広場付近に、ヒノキ伐採木をそれぞれ時期別に約 1 ヶ月放置して昆虫類に産卵させた。その後、皮付きのまま長さ 50cm の丸太を 2 本切り出して容器に入れて保管した。伐採から約 250 日後に丸太を割材して、穿孔性害虫による孔道のサイズ等を測るとともに幼虫と孔道の形状から虫種を同定した。

〔結果と考察〕

（１）聞き取り調査

聞き取り調査の結果、素材生産～原木市場～製材の過程においてその影響がみられた。被害材は安く販売され、木質バイオマスとされるケースもあった。殺虫剤の散布、成虫発生時期は原木の集積期間を短くする、などの対策が講じられていた。それぞれの過程で発生する枝や端材などの残材が繁殖源になると考えられ、適切に処理することで被害を軽減できる可能性が示唆された

（２）割材調査

3～10 月の材に孔道がみられ、人工林内ではヒメスギカミキリとキイロホソナガクチキムシ（図 1）、林業試験場広場ではヒメスギカミキリとキバチ類が多くみられた（図 2）。中でもキイロホソナガクチキムシの孔道数は多く、深くまで縦横無尽に掘られていた。羽化した成虫のサイズから調査時にみられた幼虫はさらに成長することが明らかで、孔道はより太く深くなると考えられた。以上から、本県ではキイロホソナガクチキムシによる被害が最も深刻となる可能性は高く、成虫の発生時期となる 6～10 月は（佐野 1999）、材の集

積期間を短くし、良質材の生産は避けたほうが良いと考えられた。

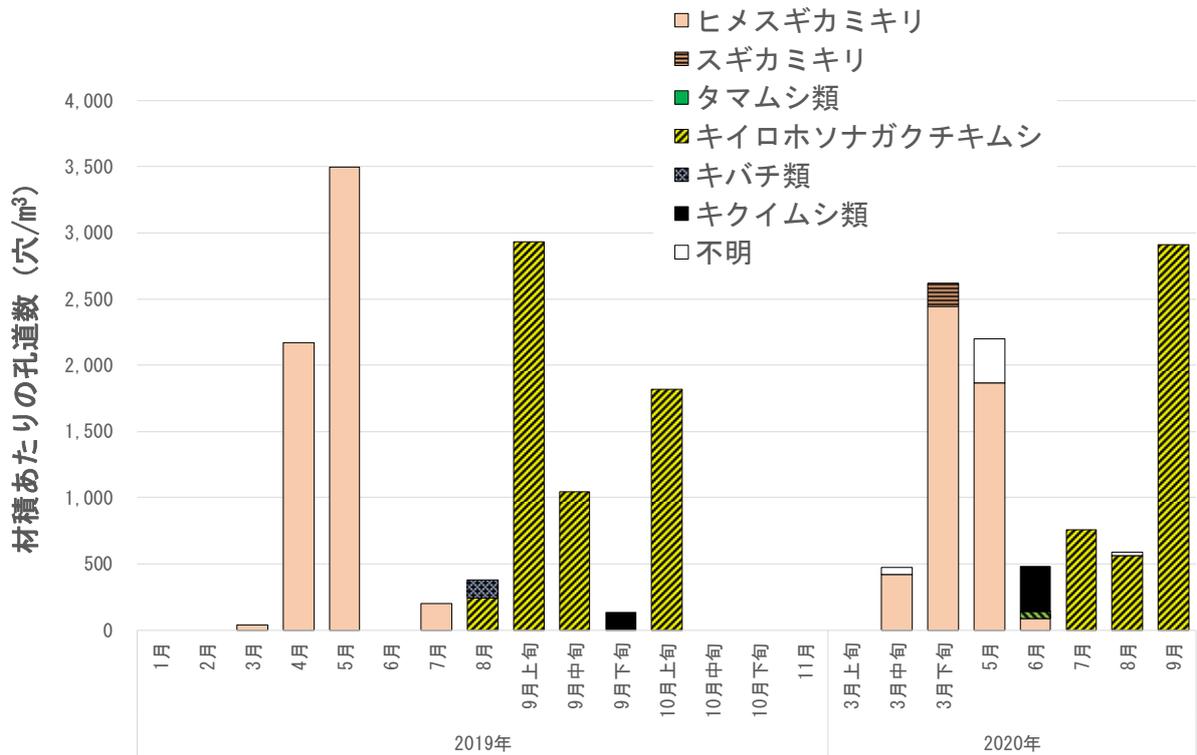


図1 1ヶ月人工林内に置いたヒノキ皮付き丸太にみられた穿孔性害虫の孔道数

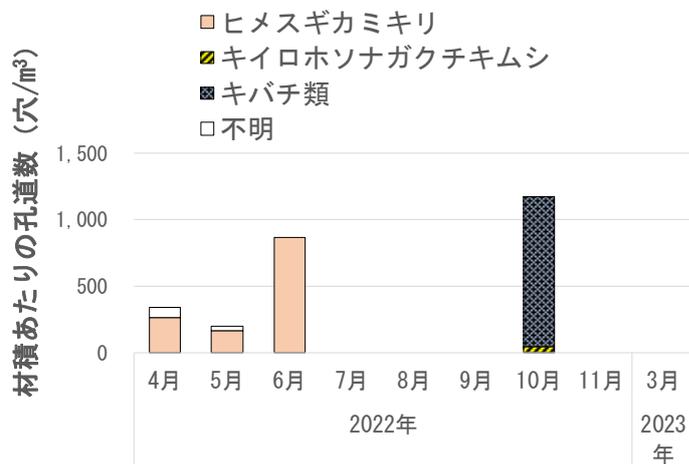


図2 1ヶ月林業試験場広場に置いたヒノキ皮付き丸太にみられる穿孔性害虫



図3 キイロホソナガクチキムシ (上: 幼虫と孔道 下: 成虫)

【参考文献】

佐野 明 (1999) スギ・ヒノキ間伐木からのキイロホソナガクチキムシの脱出消長 (森林防疫 48)